



ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報

No.29

発行日 2022年1月1日
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dousoukai@sadai.jp
ホームページ http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/

目次

巻頭言

青果流通業界に身を投じて早、44年
福岡大同青果株式会社 代表取締役社長
丸小野 光正 … 1

同窓会活動

在学生と卒業生の交流会 …… 2
農学部と農学部同窓会との意見交換会 …… 3

農学部情報

コロナ禍の農学部教育 2021
田中 宗浩 副学部長 … 4
研究室紹介その⑰ 生物科学コース 作物生態生理学分野
鈴木 章弘 教授 … 5

恩師は今

私の一日、一日一日が一人生
小島 孝之 先生 … 6
“コロナ明け”を願って同窓会を楽しみに
高木 胖 先生 … 7

若手OB・OGからのメッセージ

準備をして、提案をして、実行して、振り返る
本間 智己 … 8
学生時代を振り返って
田中 一成 … 9

会員の広場

佐賀大学農学部の創始期
渡邊 潔 先生 … 10
佐賀大学生事情（1970年代編）
諸岡 譲 … 11

支部だより

佐賀県教職員支部 …… 13

同窓会事務局からのお願い …… 13

編集後記 …… 13

協賛広告 …… 14

巻頭言



青果流通業界に身を投じて早、44年

福岡大同青果株式会社 代表取締役社長 丸小野 光正
(S52年卒 農学・作物)

新年明けましておめでとうございます！コロナ感染症により2年近く大変な生活を強いられてきましたが、今年こそ良い年になるよう願っております。

私は、現在の太宰府市のみかん栽培農家の長男として生まれました。地元の小・中・高等学校を卒業しまして、1973年佐賀大学農学部、当時の農学科に入学し3年次には作物学教室に進みました。

私は、入試の時初めて佐賀市に来ました。JR佐賀駅は現在の高架駅ではなく平面の駅であったと記憶しています。確か卒業の1年前に新しい駅が完成したと思います。

入学後の記憶としては、とにかく強烈な蚊に悩まされました。大雨が降りますと野中商店や教養部周辺は冠水しまして通行不能となっていました。そして、STS周辺では水が引いた後、雷魚が道路に転がっ

ていました。また、野中商店から南方面の生協に向かって、機動隊が突入しやすいように施された『佐賀大学方式』の塀、以上古き良き思い出です。

今思えば、せっかくの自由な4年間と云う時間を有効に活用し、学業も含めもっと真面目に取り組んでおけば良かったと反省するばかりです。

私は、生物研究会にてサークル活動に没頭していました。同期は、前農学部長の有馬進氏、農学部同窓会副会長の森田昭氏、それに同理事の松尾孝則氏も所属されていました。それ以来お付き合いさせていただいています。色々な思い出があります。わずか4年間という短い期間ではありましたが、良き先輩、友人に恵まれ一生忘れることのない青春時代となりました。

私事で恐縮ですが、私の伴侶も当時教育学部の学

生にてこの場で知りあい結婚の運びとなりました。ちなみに5人の子宝に恵まれました。

農家を継ぐことも無く、就職活動もすることも無く、卒業を迎えようとしていたのですが、偶然、学生課にて福岡大同青果のパンフレットを見て、何となく試験を受けてみようと思っていましたところ、藤井教授のお力添えもありまして、卒業と同時に、1977年（S52年）に福岡大同青果へ入社しました。

せっかくの機会ですので、少々、我が社の宣伝をさせていただきます。2020年の取扱実績は30万7千t、683億円で全国ランキングは7位です。2016年、五十川市場、東西2市場の旧3市場が東区アイランドシティに統合、移転しました。通称はベジフルスタジアムです。敷地面積は約15万㎡。新市場の特徴は、場内物流の効率化、コールドチェーンの充実、移転前と比較して定温卸売場面積は約7倍の1万㎡あります。実際に来場していただきますと一目瞭然です。

余談ですが、旧五十川市場跡地に、2022年2月、「ららぽーと福岡」がオープンしますが、そこに現物大、約20メートルのガンダム像が展示されます。

現在、弊社には8名の佐賀大学卒業生が在籍しています。まずは、私、丸小野。常勤監査役の草場昭夫君。野菜第3課長の藤井重隆君。野菜第2係長の村井祐樹君。営業企画課係長の中村春華（旧姓・石志）さん。同じく営業企画課係長の上野純弥君。人事課の小柳文乃さん。それに野菜第3課の鬼丸敦也君です。有馬進氏の教え子さんが入社されています。2022年4月には、新たに1名が入社予定ですので9名体制となります。出身大学別では福岡大学に次いで第2位です。因みに第3位は7名の九州大学です。

新市場建設には363億円の血税が投入されています。我々福岡大同青果の使命は、福岡市民160万人、福岡都市圏約259万人に対しまして、安全・安心な生鮮青果物を安定的に供給し市民の生活に資することと認識しています。また、九州の拠点市場として新たな販路を拡大し、更には博多港に隣接している



写真1 ベジフルスタジアムの全景



写真2 福岡大同青果市場におけるセリの風景

地の利を生かして東南アジアを中心に輸出事業も推進しています。

弊社と子会社には約200人が在籍しています。私個人としましては、その家族を含めまして、日々安心した生活を送ることが出来ますよう、会社の舵取りを確りと実行しなければならないと思っています。

私は、大分県の『カボス大使』を拝命しています。また佐賀県にて生産されます農産物の重要性も認識しているつもりです。故郷の大分県を始め佐賀県、福岡県、さらには九州の青果物の安定的な販売、再生産価格の維持によって生産の振興に繋がりますよう日々尽力していく所存です。

同窓会活動

在学生と卒業生の交流会

令和3年11月24日（水）の18：30から、同窓会館会議室とインターネットを接続し、各支部の協力を頂戴して、在学生と卒業生の交流会を開催しました。昨年度に引き続き、コロナ禍での実施でしたので、感染対策を重視しながら対面と遠隔のハイブリッド開催となりました（写真1）。

交流会の運営は、農学部就職委員の古藤田先生と原口先生が担当され、Microsoft Teamsの会議システムを使用したハイブリッド開催となりました。

た。農学部は2年生と3年生の全員がTeamsを用いて就職情報を共有しており、さらに1年生全員にも案内を出して今回の交流会を開催する運びとなりました（約450名の在学生へ通知）。在学生は講義の一貫としてキャリア教育を受講しており、様々な業界の採用情報や業務内容の紹介等の情報は得ていますが、それだけでは知り得ない農学部の先輩ならではの楽しく身近なお話をいただくことができたと思います。

演者のうち、佐賀県のお二人は遠隔でご参加をいただきました(写真2)。他の参加者は、会場で講演をいただきながらオンラインで配信しました(写真3)。ご報告の形式は、PowerPointを用いたプレゼン形式4名、手書きメモを用いた紙芝居形式1名、口頭による簡潔な説明2名で、どの方様も社会の第一線でご活躍されているだけあって、人を惹きつける説得力のあるご説明を頂戴でき、大変感銘を受けました。特に、どうして現職を就職先として選択されたのかを決断されるプロセスについては、全員とも千差万別で紆余曲折があつて考え抜いた末の決断であつた様子がとても心に響きました。参加をした在学生には素晴らしい刺激となった事と思います。

ご講演の様子は、在学生のみ視聴可能としたオンデマンド配信を行っています。ご協力を賜りました各支部の演者の皆様及び諸先輩方には心より御礼を申し上げます。

田中 宗浩 (H4年卒 生生・施設)

登壇者リスト

開会挨拶 農学部同窓会	水田和彦 会長
佐賀県庁支部 農山漁村課	永井勘太 様
佐賀県庁支部 伊万里農林事務所	丸田沙織 様
佐賀県教職員支部 高志館高校	古川稔之 様
佐賀県教職員支部 高志館高校	大坪正幸 様
佐賀県農協連支部	森永修平 様
佐賀市役所総務部	西村幸大 様
佐賀市役所保健福祉部	上田真里 様
開会挨拶 農学部同窓会	森田 昭 副会長



写真1 遠隔による講演を拝聴している際同窓会館会議室の様子

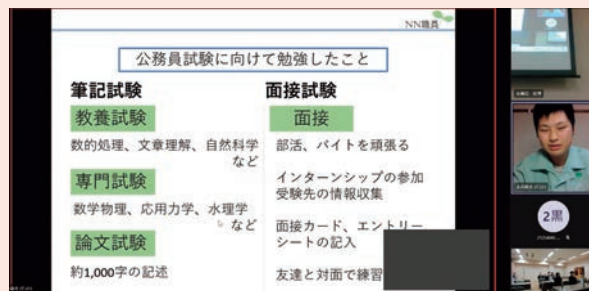


写真2 遠隔による講演中の配信画面(永井勘太様)



写真3 同窓会館からの講演をオンラインへ中継している様子(上田真里様)

農学部と農学部同窓会との意見交換会

令和3年11月17日(水)に佐賀大学菱の実会館において、昨年度は新型コロナの影響により開催を見合わせていた農学部と同窓会の意見交換会を開催しました。

農学部側からは大島学部長はじめ9名の先生方、同窓会側からは水田会長はじめ11名の同窓会役員が出席し、双方の現状及び要望を出し合い意見交換を行いました。

大島学部長からは、平成29年度より取り組まれていた「農水圏プロジェクト」が令和3年度で終了することや、人工知能を用いた新たな取り組みとして、ほ場用作業車の開発、トマトの自動収穫



水田会長あいさつ

ロボットの開発等の研究が進められていること、また、根粒菌の研究分野において大きな成果が挙がっており、近くお披露目できる見込みとのお話等がありました。農学部



大島学部長の説明



会議全景

では、これからも地域貢献を目指した研究活動を進めることとしており、同窓会からのこれまでに増しての支援をお願いされたところです。

同窓会では、意見交換会の結果を受け、今後、海外研修を志向する学生への支援策や大学と地域

の連携強化を目的とした「誰もが親しみやすい相談窓口」の設置等の検討を行うことを決めて、意見交換会を終えました。

河野 宏 (S63年卒 農学・畜産)

農学部情報

コロナ禍の農学部教育 2021

副学部長 田中 宗浩

佐賀大学では、2020年から新型コロナウイルス感染症対策として全学的に人流の制限を基本とした感染防止対策を講じてきました。2021年からは、学生間に十分な距離を確保しながら、可能な限り多くの科目を対面授業で実施しています。そこで、今年度のコロナ対策を講じた講義の様子を紹介させていただきます。

【講義室定員の考え方】

大学には市町村や県境を越えて人が集まることから、教室ではお互いの距離を保つために、着座位置の前後を空席として収容定員を50%に制限した講義を行っています。そのため、教室数が従来の2倍必要となることから、対面授業に必要な教室が農学部のみでは足りないため、全学教育機構（教養部）の教室も拝借しながら講義を行っています。

【講義形式は対面と遠隔のハイブリッド】

昨年度は、ほとんどの講義が遠隔（中継型やオンデマンド型）のみでしたが、今年是对面授業（①）を行いながら講義を遠隔で同時中継する方法（②、③）、更に講義終了後に動画を配信する方法（④）を取り入れたハイブリッド型の講義が増えています（図）。先生方はオンライン講義をスムーズに進めるために様々な工夫を凝らした講義を行っています。しかし、講義毎に方法が違ってくるため、受講学生からすれば不便な面もありますが、現在考えられるほぼ全ての遠隔ミーティングに習熟することになるため、これらの経験は今後必ず役に立つと考えています。

また、農学部独自の工夫として教室間の講義配信システム（②）を整備しました。このシステムは、1教室で行われる講義の映像と音声を他教室へ中継して相互にコミュニケーションを取ることができる装置です。大講義室、3番教室、5番教室を模擬的に一つの教室として扱うことができ、50%定員でも200人以上を対象とした講義が可能です（写真1）。

【講義室の工夫：感染防止パネル】

農学部の主な講義室には、学生用の机の上に感染

防止対策の亚克力パネルを設定しています。学生はパネル配置の席を使用することになっています。パネルを設置している教室は農学部のみとなっています（写真2）。

【大講義室や演習室を新たに整備】

佐賀大学では、来年度から教室定員を70%で運用する方向で調整が進んでいます（農学部では66%で運用予定）。そこで、大講義室を全面的に改修して総座席数を249席とし、4月からは66%定員でも150名を収容できるようにしました（写真3）。また、今年度中に2教室を自習室として利用できるように整備する計画です。

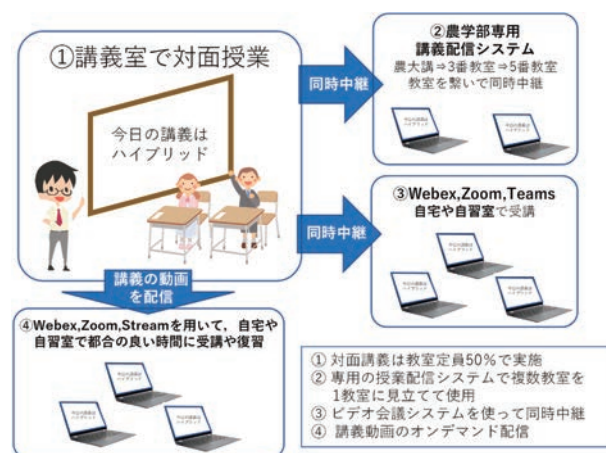


図. 農学部で導入しているハイブリッド型の講義方法



写真1 複数講義室を繋ぐ講義配信システム（他教室の映像を確認している様子、PC画面の配信も可能）



写真2 感染防止対策アクリル板を設置した教室を使用した講義の様子（教職員支部 古川稔之先生による教育実習指導）



写真3 全面的に改修して新しくなった大講義室（定員249席）

研究室紹介 その⑰

生物科学コース 作物生態生理学分野

教授：鈴木 章弘

佐賀大学農学部同窓会の皆様には、日頃から農学部並びに農学研究科の教育研究活動に多大なるご支援を賜り、さらには学生の励みになる農学部同窓会長賞も授与していただくなど、本当にかげがえのない存在であり心より感謝申し上げます。

私は2005年に鹿児島大学理学部生命化学科から作物生態生理学分野の助教授として赴任して参りました。大学時代も理学部生物学科の植物学専攻で博士課程までを過ごしており、その後数年間は農水省でポスドクを経験しましたが、一貫して植物を扱った基礎研究に携わってきたので、農学部の教育研究とはほとんど接点のない状態でいきなり農学部の教員に採用されました。そんな状態でも実験室内のベンチワークはそれまでの経験でなんとか進めることができたものの、圃場における作物栽培は想像していたのとは大きく違い、有馬進教授にお世話になりっ放しでした。作物の名を冠する研究室の教員がこのような体たらくだったわけですからお恥ずかしい限りですが、有馬先生は一から丁寧にご教授くださいました。本当に感謝しかございません。

そのようなわけで2005年以降は二人教員体制で研究分野を運営して参りましたが、基礎研究と応用研究の両輪ということを考えると非常に良い関係で教育研究を行うことができたと思います。そして有馬先生は途中から農学部長の労を取られ、時には大学執行部と農学部の間で立って防波堤のような役割を、周りから悟られることもなく飄々とこなしておられたのではないかと勝手ながら推察しております。そんな有馬先生も2020年3月に定年退職されました。掲載されている写真の1枚は最終講義の後に佐賀県の関係者の方々と記念撮影をされている一コマです。本当に長い間お疲れ様でした。コロナ禍で有馬先生退職記念の祝宴を行うことができておりませんが、近い将来には多くの卒業生と共に「大宴会」を行いたいと思っております。

現在は教員一人体制の運営が続いていて、修士2年2名、修士1年1名、4年生2名、3年生2名の計8名が在籍しております。学生は2年生の後期に配属される分野が決まり、分野における演習や実験を経験して3年生の後期から個人の研究テーマを持って日々研究を推進するようになります。研究室における教育と研究は切り離すことができない関係だと私自身は考えています。a) 研究課題の問題点の把握、b) それを解決するための実験の計画、c) 実験の遂行、d) 得られた実験結果の解釈及び問題点の把握、のサイクルを学生と共に徹底して行うことが教育及び研究を遂行していることに他ならず、理系としてのものの考え方、ひいては技術者、研究者としての素養が形成されていくものと信じています。少なくとも当分野に配属されてくる学生達は能力に疑いを持つことが一切なく、至らない点があるとすれば単に教員の責任であると常日頃自分自身を戒めているところ



です。学生達は自分自身の研究のみならず、今も昔も積極的に他の学生の研究や教員の仕事を手伝ってくれます。本日も（2021年11月22日）2年生対象の応用化学実験がありましたが、分野の学生達は実験内容を理解して非常に良く教員をサポートしてくれました。写真の2枚目はその実験後に休憩をとりながら反省会を行っている様子です。このように学生実験のサポートができること自体、学生達が成長できている一つの証左であると私は感じています。

次に当分野における研究に関してですが、基本的には「作物と微生物の共生に関する基礎研究を行い、その知見を作物生産に応用する」ことを念頭に置いた内容です。例えば、マメ科作物は根に根粒を形成して空中窒素の固定という極めて有用な形質を発現しますが、私たちは共生窒素固定の増強を可能にする遺伝子をマメ科のモデルであるミヤコグサから発見しました。さらにその遺伝子はダイズにも存在することが判明し、しかもダイズの窒素固定増強遺伝子をもつ品種は極めて限定的であることがわかってきました。言い換えれば、その遺伝子を多くのダイズ品種へ導入して窒素固定能力が増強された品種を作出することができるわけです。この研究に関しては知的財産化を目指

して外部の研究機関と共同研究を推進しているところ です。

もう1つの例としては薬用植物カンゾウに関する研究が挙げられます。カンゾウはマメ科であるため根粒菌との共生関係を確立しますが、今までにカンゾウ根粒において窒素が固定されているという直接的な報告が全くありませんでした。私たちは佐賀大学の圃場からカンゾウと共生することができる根粒菌を単離し、窒素固定を行うこと、さらにはカンゾウの主要な薬効成分であるグリチルリチン酸の生産が、共生によって増加することを突き止めました。この研究に関しても現在知的財産化を進めているところ です。

最初の自己紹介の部分で記載したように、私自身は理学部の出身ということもあり基礎研究が面白いと思いつつと研究を行ってききましたが、最近考え方が徐々に変化しつつあり、「世の中の役に立ちたい」ということを心のどこかで考えるようになってきました。とはいえ、証明したいと考えている地球上の誰も知らない生物の現象が山積しているのです、これからも基礎研究と応用研究の両輪をなんとか転がして進んで行きたいと思っています。もちろん「学生達と一緒に」です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

恩 師 は 今

私の一日、
一日一日が一人生

小島 孝之 先生



同窓会事務局松尾編集長から電話をいただいた。ありあけ29号への寄稿依頼である。締め切りは11月22日。まだまだ先の事である。という事で暫く失念させていただいた。そのうち何か同窓会の皆さんにお知らせしたい事も出てくると期待しての引き伸ばし作戦。

11月15日、2年ぶりに農学部及び農学部長を応援する農学部教員OB会を開くことにした。これは、植物病理研究室の野中教授、育種学研究室の岸川教授らが立ち上げた、いわゆる学部長を囲み、喝も入れながらの飲み会であったろうと察している。私も恐る恐る招待に応じ出席させていただいた。大先輩のOB教授達に囲まれての懇親会、畏まりながらも楽しい時を過ごした事を思い出す。なんの理由からか、この会は中断していたが、篠條さんのお別れ会の折、帰りの路上で佐古さんから藤田さんと私(?)に再開してはと要請された。野中先生にその由を連

絡すると喜ばれ、先生からの寄稿もいただき、再会の運びとなった。農学部OB教員の会の開催日は農場の収穫祭の日とし、5回開催した。ところがこのコロナ禍となりまた2年ほど中断。今回思い切って開催する事にした。大島学部長は、このような時にと戦々恐々だったが、偶然にもコロナも下火となり、素晴らしい懇談会を持つことができた。

懇親会は、学部長の農学部の現場と将来展望で始まり、その後は、参加者全員が現役時代にも劣らぬ元気な活動ぶりを披露。皆時間が足りないと言言が出たくらいで、久しぶりに活気に満ち満ちた。お陰で、全員の集合写真を撮るのを失念。肝心の佐古教



写真1 主賓がいない記念写真（前列左端が小島先生）

授と大島学部長が時間の関係で中座された後に記念写真を撮らなかつた事に気づく次第。誠に、同窓会の皆様にも申し訳ない事でした。



写真2 農作業中の佐古（元学長）先生

写真は、主役が抜けた集合写真と急遽帰らねばならなくなった佐古先生の翌日の農作業姿（奥様携帯で撮影）の写真です。近くOB教員たちの一言状況を書き込んだ会報6号も出す予定ですが、例えば、地元の農村に帰った野瀬（元学部長）さんは「田舎へ帰り6年目。多面機能的機能支払交付金（旧農地水）を活用した村の環境保全活動に係りながら、農村・農業の存続に強い危機感を現実のこととして実感している。その中で30年以上も昔に経験したイスラエルのキブツの記憶が蘇り、村落共同体としての農業・農村の継続の課題をアレコレと模索しています。」と農村に入り、厳しい農村社会のいろんな課題に取り組んでいる様子を書いてくれました。全員の状況をここで紹介出来ませんが、OB教員らが多方面で、精力的に活動している事をお知らせしておきます。

私は、参加された皆さんがとてもエネルギーに多方面で活躍されている事に刺激を受けましたが、参加してくれた大島一里学部長も素晴らしい応援団

がいる事に力強く思ってくれたことと信じます。

私も、これが発行される頃は80歳と数ヶ月。日々これ新たな気持ちで、一日を送っています。朝、布団の中で私が生まれます。今日一日が始まりますが、全てが新鮮初体験のような気持ちで立ち向かい学習します。水曜日と金曜日は、9時から10時半まで本庄コートでテニス。帰宅後、シャワー。11時から午後2時頃までは、ネット遠隔会議などの時間。月一回はオプティムの取締役会と監査役会議、月何回かの日本監査協会の会議や講演会視聴・勉強（最近自宅からネットで）。思い出したように日本能率協会主催のアグリ・イノベーション等の展示会の実行委員会（副委員長）…永原学園西九州大学の理事会…会議の整理などの事務作業と日誌…これが大事なのです。後で整理しようとする…記憶力の問題が発生。土曜日は食料品の買い物。日曜日は午後2時過ぎからテニス…。最も大変なのが家庭での老夫婦の互助活動、奥様のお世話、運転や買い物、最近奥方が庭で花いじり、私が家の中の仕事を奥方の厳しい（煩い）指導のもとにすることが多くなってきました。11月19日米大リーグエンゼルスの大谷選手がMVP最優秀選手を満票で受賞した。私は、この原稿を翌20日に書き上げました。夜12時前にはベッドで今日の一生が終わるのです。もう昨日のことは取り返しが出来ません。また明朝ベッドの中で生まれることができれば、新しい一日、新体験を楽しむ、短く忙しい一生が始まるのです。

“コロナ明け”を願って 同窓会を楽しみに

高木 胖 先生



1960年、大学4年生の時です、東京・三宅坂の国立劇場建設用定地に集結して、「安保反対」、「岸を倒せ」を叫んで国会周辺をデモ行進しました。警官隊と激突します。どの方向に逃げたら良いのかわかりません。筑後川を隔てた三池炭鉱では大労働争議があって、石炭から石油エネルギーへの転換を背景に、総資本 vs 総労働の対決が。騒然としていました。私は昭和36年佐賀大学農学部卒業で、いわゆる“60年安保世代”の学生です（学籍番号32A-25）。山川寛先生と岸川英利先生との出会いがあって、育種学教室で指導を受けることになりました。専攻生は5名、石黒文雄君は出色です。自衛隊に入って、海上自衛隊潜水艦隊の参謀、潜水艦の艦長になっています。

1961年に佐賀大学を卒業、農林水産省の官僚とし

て霞ヶ関に1年、放射線育種場で9年、1972年10月に育種学研究室に戻ってきました。忘れられないのは新入生歓迎のソフトボール大会です。新入生は、病理、作物、育種、農経、畜産、熱作の各研究室に分属されます。2年生の幹事が企画と進行を、お酒とおつまみが研究室に山積にされています。自己紹介とヤジはとても面白い。我が育種学研究室は女性が多く、弱い。いつもキャッチャーで、痛くて、翌日は笑いも出来ません。同期会に呼ばれたとき、新入生歓迎ソフトボール大会が思い出として話題になります。

ダイズ種子は40%がタンパク質で20%が脂質です。ダイズ油はパルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸から構成されていて、私は、ダイズの脂肪酸の突然変異の選抜と遺伝について論文にしてみました。2020年4月に遺伝育種学研究室の穴井豊昭教授が「ダイズ突然変異体リソースの整備と新規アレルの開発に関する研究」で「日本育種学会賞」を受賞されることになりました。受賞講演は2020年3月28日東京大学安田講堂です。座長に指名されていて、佐賀弁を改め、もっとアカデミックに、英語の質問もあるのかな？ ホテルを東

京大学の近くに予約しました。ところが、学会は“Online under the corona”で、zoomで開催されています。リモートによる討論では「話しを振られる」と“あれっ”正確に捉えたのか？ 対応が難しく当惑します。

ダイズの脂肪酸について、オレイン酸からリノール酸への生合成は2つの遺伝子、GmFAD2-1aとGmFAD2-1bに支配されています。高オレイン酸のKK21はGmFAD2-1aの塩基配列の1つが欠けていて、「遺伝子が働かない」で、50%を超えるオレイン酸含量となります。B12はGmFAD2-1bの塩基の一部が欠失していて、2つが合わさって（KK21とB12）80%以上の高いオレイン酸含量となります（通常のダイズは25～35%のオレイン酸含量です）。私は、2001年に「ダイズ種子脂肪酸組成の改良に関する遺伝育種学的研究」で日本育種学会賞を受賞しています。ガスクロマトグラフで脂肪酸を分析し、表現型変異から遺伝子を選抜する古典遺伝学的方法です。穴井豊昭教授の専門は分子生物学で、「塩基配列の情報から有用遺伝子を単離する」が出来ます。いずれの方法でも、新しい遺伝子の選抜は、共に働いた育種学研究室の学生さんの努力の賜物です。

育種学教室の新年会は50年以上も続いていて、4年生から80歳超まで集まります。隣では病理学研究室の新年会が、佐古宣道教授・元学長の乱入もありました。遺伝育種学研究室では、新専攻生の歓迎の花見（3月）、田植え後の「さなぶり」（6月）、忘年会（12月）があって、私はビールを抱えていそいそと出かけます。農学部同窓会、佐賀県支部会の懇親会は常連さんです。桜が咲き始めた頃、山口湯田温泉で「3人飲み会」を開き（2つ上の寺田康さんと、同級生の原田泰彦さん）飲み明かしました。次の飲み会は2022年の「若葉の頃」で、切に“コロナ明け”を願っています。同窓会はいいものです。



育種学教室の新年会（令和2年1月3日）

若手OB・OGからのメッセージ

準備をして、提案をして、
実行して、振り返る

JA全農九州営農資材事業所 本間 智己
(H28年卒 応用生物・システム生態)

平成27年度佐賀大学農学部応用生物科学科システム生態学研究室を卒業しました。その後、JA全農おおいたに就職し、2021年4月からJA全農九州営農資材事業所（福岡県）に配属となっております。

現在の職に就いた理由としては、地元大分県の農業に関わる仕事をしたいという思いからでした。全農の業務としては組合員の生産した農産物を消費者に届ける販売事業と、組合員に必要な資材（肥料農薬や生産資材など）を供給する購買事業に大きく分けることができます。業務としては大分県の南部地区における肥料農薬の推進担当をしておりました。推進担当の実務としては、JA担当者や生産者のもとへ肥料や農薬の提案を行ったり、メーカーと肥料農薬の普及試験を行っております。肥料と農薬については取扱い品目の数も多く、農薬では1,300品目ほど扱っております。また、作物によって肥料農薬ともに用途が異なるため、膨大な量の知識が必要となります。1年目は栽培知識・肥料農薬の知識も乏しく、JAや生産者へ提案することの難しさを感じ



ました。提案した内容が悪い結果になった場合は、生産者の収量の減少や品質の低下に繋がってしまいます。責任のある業務ではありますが、「病害虫の発生を抑えることができた」、「昨年より収量が増えた」といった声をいただくことがとてもやりがいとなっております。

現在は、九州営農資材事業所に所属され、各県域への肥料農薬の供給に係る業務や、肥料原料の供給に係る業務、県域への肥料農薬の推進企画を行っております。事業所としてはハダニゼロプロジェクトというイチゴの育苗期のハダニをゼロにするためのプロジェクトを農薬メーカー5社とタッグを組んで実施したり、Z-GIS（圃場管理システム）やザルピオ（栽培管理システム）といったスマート農業分野も行っております。業務内容は幅が広く、日々勉強の毎日

ですが、様々な分野から最適なものを提案できるのが全農の良い所と感じております。今後も、生産者の所得向上に向けた取り組みを行ってまいります。

最後に、在学生へのメッセージとして、研究室に配属してからの2年間の経験がとても貴重だとお伝えたいです。就職先によっては現在学んでいることが活かされないかもしれませんが、研究室で2年間こつこつと研究する、それを形にして発表することは今でも活かされております。仕事についても準備をして、提案をして、実行して、振り返る、の繰り返しです。学生時代に何度も取組み、何度も失敗することが、就職先でも活かされるので、学生生活を楽しむことはもちろんですが、積み重ね頑張ることにも積極的にチャレンジして欲しいと思います。

学生時代を振り返って

熊本県農業研究センター茶業研究所 田中 一成
(H26年院修了 土壤微生物)



私は平成26年3月に佐賀大学大学院農学研究科を修了後、農学職で地元の熊本県庁に入庁し、今年で8年目になります。阿蘇・天草で農業普及員として土地利用型作物(水稻、麦、大豆等)の栽培指導や集落営農組織

の育成等の業務を担当し、現在は農業研究センター茶業研究所の研究員として茶の栽培や製造の試験を行っております。

茶業研究所では近年整備したハイブリッド製茶ラインを活用し、抹茶の原料である碾茶やティーバッグ等に用いるためのCTC緑茶、機能性成分に着目したお茶など新たな茶生産技術の開発に取り組んでいます。

今の仕事は大学の研究で得た専門知識が活かせるわけではありませんが、研究室での経験が活かされていると思います。研究室に在籍していた約3年半の間に色々なことを経験させてもらいました。学会での口頭発表や大学交流で韓国に行ったり、ビジネスプランコンテストでプレゼンしたり、共同研究先の企業の視察対応など人前で発表する機会をたくさんいただきました。私はもともと人前で話すのがあまり得意ではなかったのですが、場数を踏むことで徐々に克服することができたのだと思います。また、卒論・修論・ゼミの発表資料作成では、添削で毎回真っ赤になって返ってきていたことを思い出します。熱心に指導していただいたおかげで自分の研究をわかりやすく相手に伝えるための資料の作り方や発表の仕方など今の仕事に活かされている技術が自然と

身についたのだと思います。先生方にはとても感謝しています（入庁してからも色々お世話になりました!）。

最後に在学生の皆さんへ、研究室の恩師の言葉をお借りして「よく遊び、よく学べ!」。私は遊んでばかりでしたが、遊びも勉強もたくさんのことを経験して楽しい大学生活を送っていただければと思います。



写真1 ハイブリッド工場ローターベイン



写真2 1番茶の新芽

会員のた場



佐賀大学農学部創始期

渡邊 潔 先生（賛助会員）

1 佐賀大学農学部の設立

第二次大戦後の日本農業は、終戦後の食糧不足の困難な時期を迎え、これをいかに克服するかが問題であった。九州の有明海を囲む広大な平坦地域は日本有数の肥沃な農業地帯であり、地元佐賀県は西南日本の食糧基地の中心的な県として位置づけられ、食糧生産を確保するのに最適の地であった。佐賀大学は、まさにこの地域の中心に位置する大学として、農学研究や優秀な人材の教育と養成を日本国民・政府から期待されたのである。

この状況の下で、昭和23年7月、県は佐賀大学に農学部を設置することを条件に6,000万円相当の土地・建物・物品を寄付することを議会決議し、政府に申請書を提出。政府もこれを受け、昭和24年5月、新制佐賀大学の文理学部の中に農学専攻として設置。同時に佐賀青年師範学校（久保泉）を附属農場として設置。昭和26年4月、文理学部農学科（作物学・園芸学・育種学・農芸化学・植物保護学・畜産学・農業土木学・農業経済学の八講座）を設立（写真1）。昭和26年10月、農学科は赤松町の成美高等女学校跡（現在の県庁南別館駐車場）に移転。昭和28年2月、赤松地区に農学科研究棟（1号館）が竣工（写真2）。昭和30年7月に農学部設置となり、文理学部より分離独立する。昭和35年3月に農学専攻科設置、昭和36年4月に農業土木科設置。これに伴い昭和38年3月に農業土木科新館のコンクリート三階建が校内北西に竣工し、農学部の中で一際目を引く建物となる。昭和40年農芸化学科設置。本庄地区への統合計画によって、昭和41年、本庄地区に農学科・農業土木学科研究棟竣工に伴い移転。昭和41年10月農芸化学科研究棟竣工。昭和43年4月園芸学科設置。昭和45年園芸学科研究棟竣工。昭和46年3月大学院農学研究棟竣工。昭和50年有明海海象観測施設が設置された。

2 農学部の赤松校区時代

文理学部農学科時代は、学生は教養課程に赤松キャンパスから本庄キャンパスまで往復して不便を感じていたが、皆元気で希望を燃やして勉学に励んでいた。当初は、教員の資格審査が厳しく教員の数も少なかったが、希望に燃える農学部の教員はその



写真1 文理学部農学科設置の研究室（昭和26年）

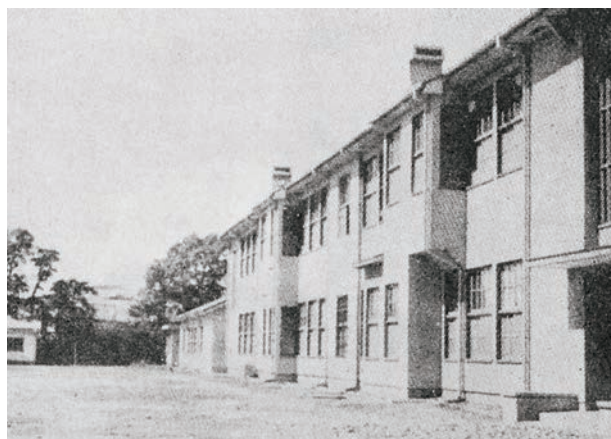


写真2 文理学部農学科時代の1号館竣工（昭和28年）



写真3 ワシントン椰子の並木

後ほとんど全員が博士号所有者となり、佐賀大学の中でも断トツの数を占め、九大に負けるな、の気持ちであった。教員も学生も共に、研究・勉学に励み、おかげで卒業生たちは公務員や大手企業への就職も多かった。当時の教職員組織と履修科目を示す(表1、2)。

このカリキュラムは明らかに総合農学的な科目構成であるが、やがて農業土木学科、農芸化学科、園芸学科、畜産学科、農業経済学科へと分科していく科目構成であった。

3 農学部の本庄校区時代

昭和41年に本庄地区に建設中の農学部の三階建てビルが竣工し、赤松町のキャンパスから新校舎に移



写真4 研究棟は支柱で補強。右側は事務棟

動。新校舎は高度経済成長期に作られたため、赤松校舎の木造に比べ別世界の様であった。昭和41年4月に移転が完了した。

表1、2

職 名	氏 名	専 攻 科 目	職 名	氏 名
学 長	理 博 西 久光	植物病理学, 微生物学,	助 教 授	水 上 武 幸
学 部 長	田 中 富 太 郎	植物保護学特講, 農業薬		
		剤学, 植物保護学実験		
教 官 (専 門 科 目 別)		畜産学		
作 物 学		畜産学汎論, 畜産学特講	教 授 博	丹 下 正 治
作物学汎論, 飼料作物学	教 授	畜産学実験, 農場実習		
作物学特講, 作物学実験	田 中 富 太 郎			
農場実習				
食 用 作 物 学, 工 芸 作 物 学	助 教 授	畜産学各論, 家畜飼養学	助 教 授	武 富 萬 治 郎
作物学実験, 農場実習	藤 井 義 典	畜産学実験, 農場実習		
		農業土木学		
	助 手	土地改良学, 農業水工学	教 授	田 町 正 善
	田 中 典 幸	農業土木学実験 I, II		
園 芸 学		農業造構学, 測量学, 農	助 教 授	田 中 宏 平
園芸学汎論, 園芸学特講	助 教 授	業土木学特講, 農業土木		
園芸学実験, 農場実習	島 田 恒 治	学実験 I, II		
		農業経済学		
園芸学各論, 花卉園芸学	助 教 授	農業経済学, 農業経営学	助 手	渡 辺 潔
園芸学実験, 農場実習	山 田 嘉 夫	農業経営学特講, 農業経		
		営学演習	教 授	岩 田 信 義
育 種 学	助 手	農政学, 農業協同組合論	助 教 授	伊 東 勇 夫
育種学, 遺伝学, 育種学	助 教 授	農業経済学特講, 農業経		
特講, 育種学実験	山 川 寛	済学演習		
育種学実験	講 師	事務職員		
	岸 川 英 利	事 務 長	文 部 事 務 官	松 尾 佳 年
農 芸 化 学			同	重 松 広 次
農産製造学, 栄養化学,	教 授 博		同	佐 藤 広 市
生物化学, 農産製造学実	三 山 良 輔		同	横 尾 儀 一
習				
土 壌 学, 肥 料 学, 農 芸 化	教 授 博			
学特講, 農芸化学実験	永 田 正 直			
	助 手			
	宮 崎 芳 光			
植 物 保 護 学				
応用昆虫学, 応用昆虫学	教 授 博			
特講, 植物保護学実験,	横 尾 多 美 男			
農業気象学				

専 攻 科 目		専 攻 科 目		関 連 科 目	
必 修 科 目	単 位	選 択 科 目	単 位	関 連 科 目	単 位
作物学汎論	2	作物学特講	8	動物分類学	4
食用作物学	4	飼料作物学	2	動物細胞組織学	4
特用作物学	2	作物学実験実習	1	動物生理学	4
作物学実験実習	1	園芸学特講	2	動物実験発生学	2
果樹園芸学	3	花卉園芸学	6	動物学通論	4
蔬菜園芸学	3	造園学	2	植物分類学	4
園芸学実験実習	1	園芸学実験実習	1	植物形態学	4
畜産学汎論	2	家畜飼養学	2	植物生理生態学	4
畜産学各論	4	畜産学特講	6	細菌及免疫学	4
畜産学実験実習	1	畜産学実験実習	2	動物学実験	2
土壌学	2	家畜繁殖学	2	植物学実験	2
肥料学	2	畜産学実験実習	1	化学通論	4
農産製造学	2	農芸化学特講	6	理論化学	1 4
農芸化学実験	1	栄養化学	2	無機化学	4
遺伝学	3	農用薬剤学	2	有機化学	1 4
育種学	3	農芸化学実験	1	分析化学	4
育種学実験実習	1	生物統計学	2	化学実験	1 3
植物病理学	4	植物病理学	4	物理学通論	6
応用昆虫学	2	植物保護学特講	6	力学	2
植物保護学実験	1	微生物学	2	数学概説	3 4
農業経済学	2	農芸学	2	微分方程式論	4
農業経営学	2	農業経済学特講	6	数理統計学	2
農政学	2	農政学	2	鉱物学及岩石学	4
農業経済学演習	1	農村社会学	2	気象学	2
農業機械学	2	農業評価学	2	機械工学大要	3
土地改良学	4	農業工学特講	6	経済原論	1 4
農業工学実験実習	1	農業気象学	2	社会政策	4
農場実習	2	測量学	2	統計学	4
農学					
卒業論文	6				
	66			合計 94単位以上	

注：『学生便覧』（昭和27年度版）

佐賀大学生事情 (1970年代編)

卒業してはや43年、今更大学時代のことを想いだそうにも記憶の断片しか残っていません。

その大学時代は授業にもあまり出席せず、クラブ活動(弓道部)、バイト(家庭教師、喫茶店)、麻雀に明け暮



写真1 Web会議中 後方の職員も農学部OG

諸岡 譲 (S53年卒 園芸・果樹)

れていました。この結果、留年して5年の学生生活を送る羽目になりました。

モラトリアム(人生の猶予期間)と勝手に決め込んで、楽しく、無責任に自堕落な生活を送っていました。ところが人生わからないもので、公務員になり32年勤め、民間企業に転職し8年間、今は起業して小さな会社を運営しています。

大学、まして学業のことは、書くネタがありませんので当時の大学生生活のことを書きます。

1 衣

- ①ヤッケ(ペラペラの雨具、合羽をタウンウェア):
現在のパーカー・トレーナー、これがあれば冬期は過ごせた。ちょっとおしゃれにレッド・ブルー
- ②チャンチャンコ(綿入り): 冬季の下宿部屋着の定番、コタツとベストマッチ
- ③サンダル(周年利用、基本ソックスははかない):
強者は下駄、空手部は鉄下駄
- ④ヘアスタイル(基本長髪): 気分はジョン・レノン、実際は金八先生風の学生がキャンパスに増殖

2 食

- ①生協学食(貧乏学生のセーフティネット): 水みたい薄いカレー 200円、うどん150円くらいだったかと
- ②学生食堂
 - ・中村屋(現在も池田屋として営業中): おばちゃん作るちゃんぽん、カレーが美味しい
- ③喫茶店
 - ・あずさ(正門前、閉店): 少年ジャンプ、少年チャンピオン、少年マガジン等を読みながら、焼肉定食か焼き飯を食べ、食後のコーヒーが定番、バイトで金銭的に裕福な学生のみ利用
 - ・ミネ(大学東郵便局横、閉店): 筆者がバイトをしていた。コーヒーとカレーには自信あり、隣は雀荘

3 住

- ①不知火寮(伝統ある学生寮、取り壊され現在存在せず): 佐賀大学の伏魔殿、幽霊が出る、野草や釣った魚で自炊など伝説あり
- ②下宿(三畳一間、トイレ、風呂、洗面所共同が基本)
 - ・若松荘(大学南、バイパス南): 下宿代2万円以下、夜になると毎日宴会、空手部のH君が大暴れ
 - ・松風寮(大学東、鬼丸): 二階建て、下宿代2万円以下、夜になると雀荘化、吉田拓郎、井上陽水風フォークソング弾き語り聞こえてくる。但し下手くそ

4 娯楽

- ①映画(当時4本立てオールナイト上映、現在すべて閉館)
 - ・朝日館(旧市民会館前、水ヶ江): 洋画の名画
 - ・大映(佐賀神社東、水ヶ江): 大魔神、ガメラ等怪獣映画、座頭市
 - ・佐賀有楽映画劇場(佐賀神社北、松原、現在もミニシアターあり): 邦画の名画
 - ・佐賀平和劇場(佐賀神社北、松原): 邦画の名画
 - ・DXさが(松原川沿い): 番外編、裸体鑑賞ライブ



写真2 1973年入学園芸学科果樹教室一同
右端が45年前の筆者



写真3 半世紀前の朝日館

劇場

- ②ギャンブル
 - ・パチンコ: 自称生活費と学費を稼ぐ強者あり、大半は学業に支障あり
 - ・麻雀: 4人運命共同体、全員が勝つまで続く悪魔のエンドレスゲーム

5 飲み屋(コンパ=飲み会、新入生歓迎や部活コンパ等飲み潰れないと終わらない。救急車で運ばれることもあり。)

- ①屋台(佐賀神社東、現在閉店): おでんが美味、人と気分により価格が違う
- ②焼鳥屋 武蔵(県立図書館南、現在も営業中): リーズナブルで美味しい
- ③大学祭: 模擬店で酒類も提供、酔っ払いの喧嘩多数、翌日はキャンパス全体が酒臭い

まとめにならないまとめ

思い返せば、私にとって佐賀大学生時代は宝物であり財産です。

ただ、後輩諸君は絶対マネしないでください。

結果的に真面目に大学生活を送った同級生とは大きな差が付きましました。

支部だより

佐賀県教職員支部

令和3年度の佐賀県教職員支部総会は、新型コロナウイルス感染防止の観点から、昨年同様に書面による決議としました。

議事では、事業報告として農学部同窓会事業への教職員支部役員への参加状況。会報「ありあけ」に寄稿した教職員を紹介し、あわせて決算報告を行いました。

また、令和4・5年度の役員改選を行い右のように決定いたしました。以上ご報告いたします。

佐賀県教職員支部 令和4・5年度役員

支部長	江島 博文	昭和62年	農芸化学科卒業
副支部長	外戸口良文	昭和61年	農業土木科卒業
副支部長	三原 聖子	昭和63年	農芸化学科卒業
幹事長	松尾 信寿	昭和63年	園芸学科卒業

支部長 大坪正幸 (S59年卒 農学・農経)

農学部卒業生の皆様へ 会費納入のお願い

卒業生の皆様と同窓会事務局とのつながりを変わることなく保っていくために「会費納入」をお願いします。農学部同窓会の運営経費は、会員の皆様から納入いただいた会費で賄われております。同窓会の運営が母校や後輩学生への支援につながっていることにも想到いただき、重ねてお力添えをお願いいたします。

〈会費〉

- (1) 1年会費は2,000円（毎年納入していただくものです）
- (2) 3年会費は6,000円（3か年分まとめて納入していただくものです）
- (3) 70歳未満の方の終身会費は30,000円
- (4) 70歳以上の方の終身会費は15,000円

会費は納入いただいた時点以降の取り扱いであり、納入以前の未納については問いません。

〈手続き〉

会費の納入方法は、ゆうちょ銀行振替口座への振り込みとなっています。

同窓会事務局（TEL0952-23-1253）まで連絡をいただければ、払込取扱票をお送りします。

編集後記

● 会員の皆様方には、それぞれの思いを胸に2022年の新春を迎えられたことと思います。

● 思い返せば、昨年は1年遅れで東京オリンピックが開催されましたが、それよりもなにより新型コロナウイルス感染症の話題ばかりが思い起こされる1年であった感がします。

● さて、今号では、「巻頭言」を全国屈指の青果卸売業である福岡大同青果株式会社を率いておられる丸小野光正社長に執筆いただきました。また、恩師の近況をお繋ぎする「恩師は今」は、小島孝之先生、高木胖先生に執筆いただきました。両先生ともにお元気で御活躍のようで何よりです。さらに、現在の農学部を知っていただくために、コロナ禍における農学部の教育状況を田中宗浩副学部長に、作物生態生理学分野の紹介を鈴木章弘教授に執筆いただきました。

● 他にも、一部同窓会活動もコロナ対策を講じて実施できるようになり、今回は2つの行事を報告しています。また、前号では掲載できなかった「会員の広場」

にも、渡邊潔先生を始め2名の方から投稿いただきました。さらに、「若手OB・OGからのメッセージ」も佐賀県外で活躍する2名の方に投稿いただきました。執筆いただきました皆様方には心よりお礼を申し上げます。

● ところで、佐賀県では、昨年末には新規コロナ感染者数0人が35日以上継続しており、前年は自粛を余儀なくされた忘年会も実施できるようになって、さがん街も徐々に元の賑やかさを取り戻しつつあります。しかし、全国・世界へと目を向けると、オミクロン株の感染拡大が続いており、予断を許せる状況ではありません。ウィズコロナが実現できる世界が待ち遠しい限りです。

● 最後になりますが、会員の皆様には、気軽に、また積極的に御投稿いただくなど、今後とも農学部同窓会報「ありあけ」のさらなる充実・発展に向けて御協力・御支援をよろしくお願いいたします。

松尾 孝則 (S52年卒 園芸・植物病理)

協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、長引くコロナ禍で経済的にも厳しい状況の中、協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げますとともに、協賛各社の益々の御発展をお祈り申し上げます。



Grain & Pet Care Communication

株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>

JAグループ佐賀 消費拡大運動実施中!

食 べよう! 飲 もう! 飾 ろう!



耕そう、大地と地域の未来。



JAグループ佐賀

JA佐賀中央会/佐賀市栄町3番32号 TEL.0952-25-5115

JAグループ佐賀

検索